
短編 総編集!!

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編 総編集！！

【Nコード】

N0086M

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

6年生の頃に書いた

短編をまとめてみました！！

興味本位で見てください。

この話は、名探偵コナン☆自作小説☆
にも掲載されています。

？バス恋（前書き）

オリキャラ視点です。

バスで蘭に会った男の子は・・・？

？バス恋

俺は浜田公平。東都高校に通う高校二年生。今日はバスに乗って図書館へ行く途中……！！？！！？！！？！！？！！？

（すっげー美人。）

バスに乗ってきたすごい美人な彼女。名前はまだ知らない。ついでに後ろの女は……！！？

（南田聖子！）

こいつは俺の幼馴染。高校では離れたが……。

「あっれー？公平？」

「聖子ちゃん。知ってるの？」

「あ、前に言ってた公平だよ。」

「公平君？よろしくね、毛利蘭です。」

——彼女の名前は毛利蘭——

「蘭ちゃんね、料理も出来るし頭も運動もよくできるんだよ！」

（料理かゝ食べてみてーな……）

俺は聖子たちと別れ、テレビを見た。

「工藤新一！また難事件解決です！高校生にして日本の警察の救世主というのはすごいですね。」

新聞を見ると・・・

〈日本の警察の救世主。工藤新一難事件解決！〉

世の中は不公平だ。なぜ、いい所取りばかりの人間がいるだろう。思いながらもひそかに憧れているのも事実。でも、俺の頭じゃ無理無理。

母親だって、あっちは藤峰有希子。天下の元大女優。

こっちはスーパールのまとめ買いが好きなミーハー。

父親だって、あっちは工藤優作、数々のベストセラーを取ってきた推理小説家。

こっちは未だに係長から出世できない中年太り。

俺の顔も平均並。だけど・・・

美人な彼女を貰ったってバチあたらねーよな？

ある日。

ウイイイイーン

「「あ。」」

「毛利さん。」

「公平君？」

（やりー！また会っちゃったよ。もしかして、運命？）

「ねえ、毛利さんは好きなひとっていないの？」

単刀直入に聞いてみた。

すると蘭は公平を見て赤くなり

「うん。」

つと言った。

（もしかして、俺？）

（何でわかったんだろう？さすがに新一とはいえないけど・・・）

「毛利さんさー。これからどこ行くの？」

「ちょっと、病院に。」

「おみまい？」

「そんなところです。」

（家族がどっか悪いのかな？）

そう、病院に向かう理由は新一が犯人とトラブルになり、怪我を負ったからだ。

（次ぎあうとき告白しようかな）

なーんてのんきに本人は思っていた。これからどうなるかわからずに……

——二日後——

ウィーン

「あ、毛利さ……？」

一緒に乗ってきたのは聖子と……あの、工藤新一！

「あ！公平！」

「よ、よお。」

二人は何かを言い合っていた。普段の優しい蘭とは違うと思うほどの険しい顔。

「何よ！おとなしくありがとうくらいいったら？」

「だから！何度も言ってるだろ！？」

「心がこもってないのよ!」

「これ以上どう言えってんだよ!？」

すると聖子がいきなり

「ラブラブでしょう？」

俺は認めたくなかった。

「私達と同じ幼馴染らしいよ。」

「へ、へえゝあの工藤新一と。」

「うん、二人は私達の間でなんていわれてるか知ってる?」

「い、いや。」

「名物なのよ!!!」

「へ?」

「帝丹高校名物夫婦!」

「ふ、夫婦!？」

「あ、ちがうの。はたから見れば両思いは一目瞭然。わかってないのは本人だけ。でも、今ははれて恋人同士。私達、3年B組がキューピットとなってね!」

(うそだろ？)

俺は石化した。

はつきり言って、モアイ像状態。

「ちょっと、公平！聞ってるの？」

「あつ、公平君、おはよう。」

「お、おは・・・」

俺が言おうとすると工藤新一が止めた。

「君が公平クン？ 蘭がお世話になっていたそうだね。俺からも礼を言っとくよ、ありがとう。」

その後、こっそり聖子が

「蘭を取ると、工藤君が再起不能にしちゃうって噂あるんだけど・・・それ、本当だから。」

そういつて、笑顔。ただし、目が笑っていない。

すぐさま俺は彼女を諦めた。あの自身満満に事件を解決している

工藤新一がほれた女が絡むところも変わる。

おまけ

「ねー、公平、付き合っただけいいところがあるんだけど。」

「え？」

場所は帝丹高校。

「ていやー！」

そう、今日は空手の練習試合。

(!!)

「蘭ちゃん、ココの主将なんだよ。かっこいいよね。」

俺は心底すごい奴を好きになったと思った。

この恋はいい思い出となるだろうか……。

？バス恋（後書き）

初期のころに

かいたので・・・

内容はめっちゃくちゃかも・・・

? 天使のち悪魔。 (前書き)

またまた

オリキャラ視点。

オリキャラ好きだな
って思います。

？天使のち悪魔。

俺が最愛の人とわかれて13年。

俺はもう、20歳。

今日はその最愛の人が住んでいる米花町へきた。

「新一！」

「なんだよ蘭。」

「今日の晩御飯何がいい？」

「んー、お前が作った奴ならなんでもいい。」

「相変わらず適當なんだから・・・」

聞こえたのは今も変わらない最愛の彼女。

「あれ？大介？大介だろ！？」

声をかけてきたのはあの名探偵。何故俺を？確か・・・名は工藤新一。
一・・・工藤新一！？

「新一か！？」

「ほら、蘭。あの大介だ！小1んときに引っ越していった！」

「大介君！？久しぶり！！」

彼女が僕のことを覚えてくれていた。

「お前、これからどこ行くんだ？」

「んー・・・ぶらぶらっと・・・」

「じゃあ、新一の家に行かない？私これから夕飯作るから、ご馳走するよ？」

二人がいつのまにかご飯を作る・作ってもらう仲になっていた。

P
R
R
R

「はい。工藤です。ええ。」

すると新一は蘭にアイコンタクト。

〈事件〉

〈いってらっしゃい〉

勿論。二人にだけにしかわからない。

「すぐに向かいます。」

「すぐ帰ってきてね。」

「ああ、先行っててくれ。」

そして新一はいなくなった。

「大介君。新一いないけど、いこつか。」

「ああ。」

~~~~~

ガチャ

「新一ん家のカギもってんの？」

「あ、うん・・・そうだけど？」

「ふうん。」

「うーん、新一ハンバーグ好きだから・・・大介君！ハンバーグでいい？」

「あ、ああ。」

みるからに大きい家。昔からどこか育ちが良さそうな感じだった。  
まさかココまでとは・・・

「毛利！。」

「んー？」

「お前達さ。どこまで進んでんの？恋人同士だろうけど。」

「恋人じゃないよ！正しくは元恋人。」

俺の心に希望が宿った。

「それなのに料理すんのはえらいよなー。」

「そんなことないよー？だって、夫婦だし。」

「へ？」

「聞こえなかった？私達夫婦なの。ちなみにお腹には子供もいるんだ。」

耳を疑った。恋人じゃなく、元恋人。なぜなら夫婦だから。

（なるほどね。）

「それはおめでとう。」

「ありがとう。」

つと天使の微笑み。今日のこと、  
「天使」とみるか「悪魔」とみる  
か・・・

## ？中学生の恋心

俺は前田聡氏。中学一年生。

好きな女の子は同じクラスの吉田歩美。可愛くて明るくてカチューシャが印象。

他にも元太や光彦も友達だ。灰原はクールでまともに喋られるのは誰も居ない。

「あれ？聡氏どうしたんだよ？」

元太達に会った。話によると、カフェで歩美と灰原と待ち合わせらしい。俺も行くことにした。

カラン

「あ！おっそーい！あれ？聡氏くんもきたの？」

「ああ。」

「まあ。皆座りなさいよ。無駄な時間は使いたくないの。用件を言いたいんだけど。」

やっぱり灰原とは話が出来ない。

「あのね、今日哀ちゃんが皆にあわせてくれる人が居るんだって！」

「え？誰ですか？」

「会ってみればわかるわ。」

カラン

「よ、久しぶり。」

「新一お兄さん！？」

「ちがうちがう。これならわかるかな？」

そういつて黒ぶちの眼鏡をかけた。」

「コナン君！」

コナン？誰だ？俺は小3からこいつらと付き合い。それ以前からの付き合いってことか？

「コナン君ー！会いたかった。」

歩美はコナンに抱きついた。

「久しぶり、歩美ちゃん。」

すらっとした身長に無駄のない顔立ち。眼鏡をかけているのがもったいない。

「あのね、新一お兄さんの子供もコナン君って言うんだよ！」

「ま、座れば？話すなら座ったほうがいいんじゃない？」

「相変わらずだな。」

「あら、ほめてくれるの？」

「天才科学者ってところだけな。」

「私も名探偵って所だけならほめてあげるわ。他は彼女にことになると形も無いしね。」

「どういう意味だよ。」

「そういう意味よ。」

「可愛くねーな。」

「ありがとう。最高の褒め言葉だわ。」

「こんにゃろ。」

灰原とまともに話せる奴が——いた。

P  
R  
R  
R  
R

「はい。」

『ちよっとー！今どこにいるのよ！』

俺にだけかすかに相手の声が聞こえた。

「悪い悪い。ちよっと            ってことになってさ。」

空白の部分は聞こえない。

『まったく、哀ちゃんに変わってくれる？』



「灰原。ん！」

携帯を差し出した。

「あら、ええ。博士のパソコンの右の引出しの真ん中。青いポーチに入ってるわ。じゃ。」

「何の話だよ。」

「あら、気になるの？女同士の話よ。いずれ、貴方にもわかるわ。」  
すると歩美は

「誰からだったの？」

「え？いや・・・その・・・」

「江戸川君の彼女よ。今こっちにくるから。」

「えー！コナン君、彼女居たんですか！？」

「え？ああ。まあ。」

それから、五分足らずで・・・

「おまたせー！」

かわいらしい女の子が来た。

「何で!？」

「哀ちゃんのおかげ。」

「そういうことか。」

「あなたがコナン君の彼女？」

「え?・・・うん・・・」

「そっかあ。」

歩美は悲しそうだった。

そんな歩美の心をよんだのか、

元太が

「コナン! 久しぶりにサッカー教えてくれよ!!」

つと言った。

「ああ!」

彼はサッカーが上手だった。いや、天才的といったほうが正しいであろう。

楽しんでいたのだが、

「ちょっとー！あんた怪我してるでしょ？」

「え？」

「ほら！やっぱり、手ひねってるでしょ？」

「わり。」

「わかってるんだったら、最初から言う！」

「はい。」

まさに夫婦そのものだった。

「あのね、皆に話したいことがあるの。来てくれる？」

場所は博士の家だった。

「今から、偽り無く、全てを話す。お前には理解できないと思うが。」

そう、俺に言った。

「じゃ、話すな。」

高校二年生だった工藤新一は当時、幼馴染だった毛利蘭と空手の優勝祝いでトロピカルランドへいった。そこでジェットコースター事件に巻き込まれたが無事、解決。だが、そこで出会った黒ずくめの男達が気になっていた。一目見たとき、平気で何人もの命を奪っている人間の目だと思ったから。そこに、都合よく、黒ずくめの男達を発見。後を追った。

そこで怪しい取引現場を目撃し、新一は取引に夢中で背後から近づいてくるもう一人の仲間に気付かずそのまま殴られ、気絶。その間に怪しい薬を飲まされ気付いたときには体が小さくなっていて、つまり幼児化した。そのときの名前が・・・江戸川コナン。なんだ。

「「「え・・・？」」」

俺は声が出ない。

「そう、そしてその怪しい薬というのを作ったのが・・・私なの。当時、私はその黒ずくめの男達の組織の一員で科学者だった。私は上の命令で気付かずに毒薬を作っていた。私の姉も一員だったの。そして、両親は他界し、肉親はお姉ちゃんだけになった。

でも、そのお姉ちゃんが組織の命令で仕事を終わったあと、用済

みというだけで・・・他の理由も無く、たった一人の肉親のお姉ちゃんの命を奪った。何度問いただしても理由を教えてくれない組織に反抗した。そして私は裏切り者として上からの命令が下るまで監禁。私は命を捨てる覚悟で工藤君の飲んだ毒薬。A P T X 4 8 6 9 を飲んだ。運が良かったのか悪かったのか私も幼児化し、部屋に会ったダッシュボードで脱出したの。」

「・・・ちなみに灰原さんの本名は？」

「宮野志保。それと、江戸川君の彼女だって言ったあの人は蘭さんよ。」

「「「えー!?!」」」

「ごめんね。」

「でも、この姿で居られるのはあと三時間。三時間たったら俺は工藤新一に戻る。」

「じゃ、『コナン君』聞いて、私はコナン君が好きです。でも、私は答えを欲しいわけじゃない。聞いてほしかったの。今はね、好きになりそうな人が居るんだ。もし、好きにな人になったら蘭お姉さんに相談するからね!」

少し泣きそうになりながらも笑顔を作る彼女。

「では、三時間。思う存分に楽しみましょう!」

「「「おー!!」」」

「やっぱ、3人はかわらないな。」

「数年前まで、あなたもこの中にいたのよ?」

「それを言うなよ、灰原。」

三時間、思う存分に楽しもうとする三人。

俺はなかなかその中に入りづらい。楽しい、幸せな空間に入れない。

「前田君?」

蘭さんが話し掛けてきた。

「やっぱ、いづらいよね。」

「まあ。」

「あの5人ってさ。何だかんだ面白いと思うの。コナン君と哀ちゃんはいつもあの三人を見守るように優しい目線で見ていた。それなのにどうして気付かなかったんだろう。新一だって・・・最愛の人なのにな?」

今から6年前。蘭さんは高校二年生。新一さんも『コナン』で、俺

は他の小学校へ行っていた。あの中

に蘭さんとおれがはいれないのもうなずける。

そして、三時間後

違う部屋に向かった二人は戻ってきた。

二十三歳の姿で。

「よ。」

「ありがとう。哀ちゃん。」

「礼には及ばないわ。」

「少しは素直になれよな。」

「うるさいわね。それでも素直なほうなんだから。」

「・・・」

「皆もありがとう。」

「ああ。受け入れてくれて。ありがとうな。」

「うん！蘭お姉さん、相談に乗ってね！」

「うん。」

「たまには変声期でコナン君として電話してください!」

「機会があればな。」

「探偵って設けてんだろ? なんかおこれよ!」

「・・・高いもの以外ならな。」

「じゃ、コナンが待ってるからもどるね。今日はありがとう。」

「じゃーな。」

そういい。二人は自分の家に戻っていった。

いい思い出になったであろう。

三人にとって、忘れられない。思い出に。



## ？中学生の恋心（後書き）

また・・・

オリキャラ視点・・・

あのときの私はなにを考えていたんだー！？

## ？レモンパイ（前書き）

内田麻美先輩視点です！

これは、本当に興味本位で見てくださって結構です！！

## ？レモンパイ

私は夢中になってしまったの。

貴方に・・・・・・・・・・

「みなさん！差し入れ持って来ました！！」

もともとは自分の所属するテニス部にもってきたのだけでも、

余ってしまったからサッカー部に持ってきたレモンパイ。

「おー！内田先輩の差し入れだぞー！」

「生徒会長の差し入れ！？」

「口にあうといいんだけど・・・」

何回も作ったことのあるレモンパイ。

テニス部の子も美味しいといってくれた。

まずいはずがない。

「・・・んー、うまい。」

「完璧だな」

ほらね。

でも・・・

「・・・なんかまじーっすよ。先輩。」

は？聞き間違いかしら。

「一年坊主が生意気言うな！ま、まずいわけが無いだろう。」

顔が引きつっている。

あやしい。

「皆、本当のことを言って。それじゃなきゃ毎日……」

「す、すいません！」

一年の子が謝ってきた。

「うそをついてすいませんでした！」

うそをついていた。まずい

一生懸命作っただけだな……

まずいって言った

一年の子。名前はなんていうんだろう・・・

〳次の日〳

朝、私は早速朝連の彼に名前を聞いた。

「君。名前は？」

「工藤新一です。」

「ふーん。ありがとう。」

「いえ。それでわ。」

私はとびっきりのスマイルをあげたつもり。なんだけど？

っと疑問に思っていると、

後ろから声が。

「すみません。」

「え？」

かわいらしい女の子がたずねてきた。

「工藤新一にこのお弁当渡してもらえます?」

何? ファンかしら。確かに彼、顔いいものね。

「悪いけど、そういうのはちょっと。」

「あ、私、ファンとかじゃなくてその・・・お、幼馴染で!」

こういう人結構いるのよね。可愛い顔して結構やるのね。ファンの子のお弁当届けるほどお人よしじゃ

ないのよね。帰って欲しいわ。

っと思い、追いつ返そうとすると

「あれ? 蘭?」

工藤君の声がした。

「新一！さがしたんだよ。はい、これ頼まれたお弁当。」

「お、サンキューな。」

工藤君をファーストネームで呼び、呼ばれる彼女。

「先輩、どうかしましたか？」

「先輩、私がファンだと思ったみたい。もてもては困るわね。」

彼女も十分もてると思う。

「私なんかラブレター一つも貰ったこと無いし。」

「なに？貰いたいのかよ。」

「こんな推理オタクといってもね。」

工藤君を平気で推理オタクという。

「俺も怪力女といっしょじゃなく。」

「なに？不満でもあるの？だったら返して。お弁当。」



「返してどうすんだよ？」

「クラスの男子にでもあげるわよ。」

「わ、悪かった。」

「ふふっ嘘よ。口に合うかわからないけど、残さず食べてよね！」

そして彼女はいなくなった。とびっきりの笑顔に向けて。

女の私でも一発で惚れてしまいそうになる微笑みで。

「バーロ。お前の作ったもの、残すかよ。」

ぼそつと言った。

だが、傍には私がいる。工藤君も私の存在に気付き。

「こ、このことは、蘭にも・・・あいつらにもいわないでくれますか？」

顔を真赤にして、必死に頭を下げる彼。

わかつちやった。

彼が彼女を好きだということ。

私も彼が好きだと気づいた。

でも、

もう、

おそい。

部室では・・・

「工藤！毛利から弁当貰ったのか！？」

「いいよなく夫婦は。」

この時、私は、何故、部員にも工藤君が漏らした『バーロ。お前の作ったもの。残すかよ。』

を言わないで欲しかったのがわかった。

” からかわられるから。 ”

「奥さんからの愛妻弁当は格別だよな？」

「ば、バーロ！夫婦でもねーし、愛妻弁当でもねー！

「愛妻家の工藤に言われてもなー。」

「なんだ？工藤は愛妻家なのか？」

「部長！そうなんですよー綺麗な奥さんが居てですねー。」

「だーかーらー、ちがうって！ただの幼馴染だっつーの！」

「本人はいつもこういうんですが、はたからみれば夫婦同然なんですよ。」

「へー工藤にそんな奴がいたとわな。」

そう、あんな可愛い彼女がいる。

「ほら、空手部にいる毛利ですよ！工藤のお・く・さ・ん。」

「え？」

部長が顔をしかめた。

それにかまわず私は今日もレモンパイを差し出す。

今日の評価は・・・

「んー・・・甘いですね。」

お砂糖をいれすぎでしたみたい。

「新一！」

また彼女。

私の胸は痛む。

「なんだ？蘭。」

「今日、おば様も叔父様もいないでしょ？夕飯作ってあげようかなって。何時に終わる？」

「んー・・・五時半くらいかな。」

「じゃ、私もそれくらいだから一緒に買出しに行こう！じゃあね！」

「お、おう。」

二人でお買い物・・・とっても複雑な気分。

「何だ？また夫婦してんのかよ。ねー、部長。」

「あ、ああ。そうだな。」

「内田先輩もそう思うでしょ？」

「え、ええ。そうね。」

それから私は忙しいからという理由でレモンパイは作らなかった。  
サッカー部の皆ともあつてはいない。

---

一週間後

裏庭に歩いていると久しぶりに工藤君が見えた。

茶髪の女の子も一緒。

「ちょっと、新一君いいの？ 蘭、今日呼び出されたいよ、サッカー部の部長に！」

「……………俺には関係ないし。」

「そんな意地張っていると、蘭とられちゃうんだから！ 知らないからね！」

茶髪の女の子は走り去っていった。

訳がわからなかったが、

予鈴が鳴ったので私は教室へと戻っていった。

~~~~~  
放課後

「好きなんだ。」

(え?)

いつのまにか告白現場の近くに居た。

「・・・すみません。今は付き合うとか・・・。」

「そんなの付き合ってみてからでも!」

「すみません!」

「じゃ、諦める代わりにデートしてくれないか?」

「こ、困ります!」

そんなやり取りが聞こえた。私は右の壁。工藤君は左の壁。さっきの女の子は木の陰、

に隠れていた。・・・

って、工藤君!? やっぱ、気になるのね。

「デートくらいいいだろう? 工藤がいるからいやなのか?」

「な、なんでここに新一が出てくるんですか!?」

顔は真赤。

「工藤なんてどうでもいいだろ? あんな奴! いい気になってる

ただだろ。1年のくせに・・・」

パシッ

「やめてください。新一の悪口は聞きたくありません!」

「いきなり叩くなんて・・・女だからって調子にのんなよ!」

「す、すいません。」

ちょっとかわいそうじゃない! あんな言い方しか出来ないの? あの男。最低ね。

「女にそんな言いかたしかできなんですか? 部長?」

「工藤! ?」

「新一! ?」

! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ?

いつのまにか工藤君は立っていた。

「悪いんですけど、これから二人で出かける用事があるで。それじゃ。」

そして毛利さんを連れていなくなった。

帰り際に私の横を通っていった。

ちらりと見えた工藤君の横顔は今までに見たこともない、

怖い顔だった。

「あやつ、やっぱり来たか。先輩、悪いことは言わないで。蘭だけ早めてください。なんせ、これから二人で夕飯の買出しですから。」

っと女の子。

「え?」

呆然と立ちすくむ部長。

そのとき私は心に決めた。工藤君にレモンパイがおいしいって言わ

れたら告白しよう。まずいといわれても、レモンパイをもっていくのはこれっきり。

—— 次の日・・・午後・・部活

「工藤君。どうかな？」

「うん。うまいっすよ。」

「え？本当に？」

「はい。」

「私ね。レモンパイが上手く出来たら告白しようと思ったの。」

「そうなんですか？大丈夫です。多分。これならいけるんじゃないですか？」

自分だとは気付いていないのね。

「あのね、工藤君——！」

「はー。結果は目に見えていたけどね。」

（明日、何気ない顔で『レモンケーキ』でももっていこうかしら。
勿論、好きだという気持ちは捨てて、ただの美人マネージャーと
して、

可愛い後輩に差し入れをね♪）

？レモンパイ（後書き）

こうやって見てみると・・・
たった1年前の自分の考えている
ことがよくわかりません・・・
一体、どうしてこんな作品を・・・
っと思ってしまう。

?Girls' mind (乙女心) (前書き)

歩美ちゃん視点です♪

?Girls' mind (乙女心)

ある日、突然やってきたかっこいい男の子。

サッカーができて、勉強もいつも100点で・・・

私が好きだった・・・

江戸川コナン君。

「おい、おめーら！ちゃんと歩けよ！」

いつものとおりを私達は意味もなく、くるくると回りながら歩いていた。

「はーい！」

こんな幸せが続くと思っていたの。

でも、毎日のように告白されるコナン君。

そのたび私は胸が締め付けられるようだった。

「コナン君！好きなの。」

「…………ごめん。好きな奴が居るんだ。」

「……………どんな子？」

「気が強くて、怒りっぽい。そのくせ涙もろい。人の悲しみや幸福を自分のことのように考えられる奴。」

「そうなの…………じゃあね。」

そうやって女の子はパタパタと走り去った。

「お前ら、そんなところで隠れてないで出てきたらどうだ？」

「あはは。ばれてしまいましたか？」

「見るつもりはなかったんだけどな。ははは。」

「あの女の子、一組の澤田さんですね。たしか、一年生のアイドルといわれている・・・」

「そんな子振ったのか！？お前！」

「悪いのかよ？」

コナン君が振ったそれは嬉しい。

・・・でも、好きな子がいる・・・

「コナン君、好きな人が居たなんて初耳です。」

「あら、ただの幼馴染じゃなかったの？」

「あ、そ、それは・・・」

「ま、いいわ。あなたが彼女のことを好きなんて誰から見ても一目瞭然よ。わかってないのは彼女くらいじゃないかしら？」

「え？」

「灰原さん、コナン君が好きな人、知ってるんですか!？」

「ええ。まあね。」

私、知りたい。コナン君の好きな人。

「えーっと、たしか・・・気が強くて、怒りっぽい。そのくせ涙も多い。人に悲しみを自分のことのように考えられる奴。でしたよね？」

「そ、それは・・・」

私は再度聞くとある女性を思い出したの。

蘭、お姉さん・・・

「蘭・・・お姉さん？」

「え？」

顔が真っ赤だ。

本当、哀ちゃんが言ったとおり。一目瞭然だね。

「ち、ちが・・！」

「コナン君が好きな人くらいわからないでどうするの？ 歩美に隠せ
ると思った？」

「女の勘って奴かしら？」

「おいおい。」

「たしかに、江戸川君は蘭さんを好きなんじゃない？ 本当のお姉さ
んみたいで。」

でも、蘭さんが好きなのは工藤君でしょ？
そして、工藤君が好きなのも蘭さん。」

「ああ、そうだよ。コナンじゃない。」

「どういう意味ですか？」

「ようするに、俺が好きなのは蘭姉ちゃんじゃない。（ボソツ）蘭
なんだ。」

「え？」

「じゃ、教室に戻るか。」

「なんて言っただろうな。」

元太君はそんなこと言ってたけど、私ははっきりと聞こえた。蘭って。

「コソ」歩美ちゃん、あとで話があります。いいですか？」

「うん。」

——
昼休み

「歩美ちゃん。コナン君のさっきの言葉、聞こえませんでしたか？」

「……聞こえたよ……」

「やっぱり、僕もなんです。コナン君、蘭姉ちゃんではなく、蘭と言っていました。」

「うん。」

私にはそれしか答えられない。

「歩美ちゃん。大丈夫ですか？」

私は・・・半分、放心状態だった・・・

「大丈夫ですか？」

「・・・あっ・・・うん。大丈夫だよ？」

光彦君は覚悟を決めたように言った。

「確かめに行きませんか？」

「え？」

確かめに・・・行く・・・？

「決定的な証拠が見つかるはずです！」

「うん！」

私も知りたかった。絶対突き止めて見せるもん！

「コナン君のことです 盗聴器や後をつけたって多分、見つかるでしょう。そこです！コナン君が博士のところへ向かうときに僕たちはチャイムを押さずに中に入り、2人の会話を聞きます。」

「2人？」

「コナン君と灰原さんのことです。2人はいつもコソコソと喋っているんですよ？多分、灰原さんも何か知っているのは事実でしょう。」

そうだ。哀ちゃんがいた！

「その作戦があったね！」

「では、コナン君が博士に打ちに行くときが決行です。」

「うん！」

それから二日後

「灰原、今日博士ん家行くから。」

「ええ。わかったわ。」

私と光彦君は目コンタクト。

「いいですか？」

「うん！」

く博士宅く

「コソツ）いいですか。静かにしててください。」

私はうなづく。

カチャ

「つたく、はい。工藤君。」

「悪いな。」

「礼には及ばないわ。彼女のところへ行くんでしょ？高校生名探偵、

工藤新一君？」

私達は息を呑んだ。

「なんだよ。高校生天才科学者に言われるとわな。」

「あら、光栄でしょ？」

「……そういうわけなんだよ。お前ら。」

え？ 私達に気付いてた？

「バレバレなんだよ。この俺がお前達の作戦が判らないとでも思ったか？」

「じゃ、私達がいるのをわかってていったの？」

「そういうことになるわね。」

「さすがです。で、新一さんというのは本当なんですか？」

「ああ。」

話によると新一お兄さんは蘭お姉さんとデート中で帰り道に怪しい薬を飲まされ、

コナンくんとなった。そして、その怪しい薬を作ったのが哀ちゃん。本名は宮野志保というお姉さん。

2人とも、自分達が生きているとばれたら命が狙われる。

それどころか回りの皆にまで危害が加わるということ・・・

「わかりました。話してくれてありがとうございます。」

光彦君はそう言った。

その場に元太君は居なかったけれど、明日話してみたい。

〽次の日

「歩美。話は聞いた。大丈夫か？」

元太君が優しく言ってくれる。

「うん。でも、ちょっとショックだな。」

「新一は蘭姉ちゃんがすきなんだもんな。」

そう、新一お兄さんは蘭お姉さんがすき。

蘭お姉さんも新一お兄さんがすき。

「歩美、俺の前だけは無理するなよ。いつでも支えてやる。ほら、俺って力持ちだろ？」

どんな慰めの言葉より嬉しい言葉。

「ありがとう。元太君！おかげでふっきれたよ！！」

「そ、そうか？なんか知らねーけど、よかったな！」

「うん！」

明日。正直な気持ちをコナン君に伝える。

そして、今の気持ちも。

今の私はすっごくすっきりした気分。

だって。

本当の自分の気持ちと

新しい自分の気持ち

わかったんだもん♪

「コナン君！好き！！大好き！！でも、他に好きな人を見つけちゃった。」

私はテヘへと笑った。

「・・・そうか。それはよかった。」

「でね、博士の家に蘭お姉さんを連れてきてほしいのと、博士を少しの時間の間、新一お兄さんの家に居て欲しいの。勿論、コナン君は来ちゃだめだよ？わかった？」

ふっきれた女の子には叶わないよう。コナンはOKした。

く博士宅

「蘭お姉さんと哀ちゃんに相談があるの！」

「「え？」」

「だって、蘭お姉さんには新一お兄さんのこと、おしえてもらいたいし。」

哀ちゃんには、アドバイスがほしいし、二人とも人生の先輩でしょ？」

「うーん私に出来ることなら言って？」

「私も。できることならするわよ？」

「ありがとう！でね、早速なんだけど、私ねあとちよつとで元太君のこと好きになるかも！ってことを 言いたかったのと、やっぱり、ちゃんと好きだってわかったら告白しないといけないのかな？」

「まあ・・・そうなるかな。」

「あなたが好きなら告白しないわけにはいかないでしょうね。」

「わかった！ありがとう。そして、何より聞きたかったのが、新一お兄さんのこと！！！」

「ええー！？」

蘭お姉さん。心底ビックリしてる！って感じだった。

「そうね、私も聞きたいわ。吉田さんと私が好きになった江戸川君のこと、工藤君に。」

「「え？」」

哀ちゃんがコナン君を！？

「あ、勘違いしないで？私は恋愛感情としてじゃないから。ただ、

同じ境遇に会ったもの同士ちょっと頼りにもなってたし。気になつていなかったとは言いがたいのよ。ただそれだけ。」

ちよつと以外だった。

「ね、話してよ！」

「あ、えーと……。」

「いいんじゃない？本人どころか聞き耳を立てるような人一人も居ないんだし。」

「コホン。では。えっと、あいつはとにかく、推理オタクなのよ！小学生から

中学生までホームズホームズ 何度聞かされたことか。でも、高校生になって探偵として一目を置かれてからただの推理オタクじゃなく

なったのよね。自分の夢をかなえさせたんだもの。ホームズのよきな探偵になるって。」

「そういえば、工藤君。サッカーは探偵の体力のためとか言ってたわね。」

「うん。サッカーとして十分プロ性があった。プロからもスカウトされたのに……探偵になるしか頭 が無くて断ったんだよ？バカだよね……ほんと、大バカ推理の介なんだから。」

蘭お姉さんが泣いてしまった。

私は悪いことをしたと思った。

だから

「でも……でも、好きなんですよ？」

「歩美ちゃん……ええ。大好き!!」

「うん!」

「まったく、本当にあなた達は天使よね。」

「「え?」」

「それに比べて私は真っ黒な悪魔。工藤君に組織と戦っただけでもお前は元の白い心が戻ったと言った。でも私は一度黒になってしまったら、

なかなか白には戻れないと思うの。

多分。天使になろうと思って努力をしている悪魔ってところかしら?」

「哀ちゃん……」

哀ちゃんは悪魔なんかじゃない!

「歩美、哀ちゃんは天使だと思う。だって、私達を見ている目。すっごく優しいもん。」

「・・・クスッ。あなたには本当。叶わないわ。」

私はそのときよく意味がわからなかったけど、多分。大人になった
らわかるよね？

私、きっとこの日を忘れない。

ううん。忘れたくない。

サイコーの時間だよ!!

? Girls' mind (乙女心) (後書き)

——全体を通して後書き。——

オリキャラばかりだったのですが、
そのうち3作品はちゃんと原作にもいるので。

えっと、一人目は麻美先輩。

そして歩美ちゃん。

最後は気付かなかったと思いますが、
大介です。

コナンの歩くキャラ図鑑の方は
おわかりいただけたと思いますが・・・

次回作もよろしくおねがいします。

桜桃

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0086m/>

短編 総編集!!

2011年10月7日03時48分発行